# 景岳会のあゆみ

景岳会 会長　松平　永芳

景岳橋本左内先生を慕い集った人々で組織する会が「景岳会」である。この際当県人会と同様、ほゞ百年近い歴史のある会の概況に付て紹介させて戴く。

景岳会は、明治三十一年（一八九八）発足した「福井会」より遅れること四年、同三十五年十月七日発足した。会務は主として第二代福井会会長八田裕二郎氏が世話人となって運営してきたので、大正十五年（一九二六）会の組織を一段と本格強化するに当り、改めて八田氏が初代景岳会会長に推され、逝去の昭和五年（一九三〇）まで会中興の祖として活躍した。

次期二代会長は加藤寛治海軍大将（聯合艦隊司令長官）で昭和五年から同十四年まで務め、次いで岡田啓介海軍大将（内閣総理大臣）が終戦を挟み昭和二十七年まで第三代会長として会をとり纏めた。

第四代会長は陸軍中将蒲穆（かばあつし）氏（日本傷痍軍人会会長）で、昭和三十三年十月、景岳先生殉節百年忌祭典を滞りなく厳修した上、老齢の故を以て辞任。バトンを現会長松平に渡し今日に至っている。

この頃になると、さきの大戦中逼塞していた会も追々建て直って来たとは言え、戦後の時流と福井出身の諸長老の相次ぐ他界で、会は再び衰退の傾向を辿った。

こゝに於いて会長は、景岳先生は福井という一地域の英傑ではなく全国の有志が崇敬追慕すべき大人物なりとし、会員を福井出身者に限らず、広く全国有志の士に呼び掛けて入会を勧誘した。かくして百数十名の会員を確保し、従来どおり毎年十月初頭欠くことなく南千住回向院の景岳先生墓前に於いて墓前祭を厳修して今日に及んでいる。祭典は若年層の参列を期待し、刑死当日の十月七日に近い土曜日午後施行することゝしている。

祭典次第は午後一時開始、僧侶読経―会長祭文奏上―参列諸員焼香―会長挨拶―本堂広間に於ける諸報告―懇談というのが定着した順序である。平年の参列者は二十乃至三十名程の少人数ではあるが、欠かすことなく脈々として続けられているところが特筆すべき点であろう。

出版物等による啓蒙、広報活動は会勢の消長により適宜行われて来たが、現時点に於いては定期出版物はない。ただし福井市立郷土歴史博物館とは密接な連繋の下、「啓発録」の普及には常に前向きで対処している。同館の元学芸員、現皇学館大学教授伴五十嗣郎氏の「橋本左内著啓発録」の全訳注は講談社学術文庫五六八（定価七六〇円）で広く全国に普及されている（初版発行一九八二年、現在二十二版を重ねている）ので、当県人会会員各位の購読されんことを切望して、景岳会の紹介を終る。

左内先生墓（昭和八年墓石の上に堂を築く）
東京南千住「回向院」内

○回向院所在番地
東京都荒川区南千住五丁目三三―一三
電話　〇三（三八〇一）六九六一
○交通
・上野（始発）又は日暮里駅にて、JR「松戸行」に乗車、南千住駅で下車、徒歩五分。
・地下鉄日比谷線の南千住駅で下車、徒歩五分。

（一〇〇年のあゆみ／東京福井県人会より転載）

関係者らが参加し橋本左内の墓前祭

◇…幕末の志士、橋本左内の墓がある荒川区南千住の浄土宗回向院でのほど、左内の墓前祭が行われた。橋本左内は安政の大獄のため安政六年（一八五九）二十六歳で江戸伝馬町の獄舎で処刑された。遺体は当時刑場のあった小塚原に移され、近くの回向院に埋葬された。

墓は一度福井に移されたが、明治二十六年に再び回向院に再建された。それ以来、景岳会が中心となって毎年、命日の十月七日に近い日を選び墓前祭を続けてきた。

この日は景岳会の松平永芳会長をはじめ、東京福井県人会の鎌倉安一理事長ら関係者や勝山市から上京した人も含め約三十人が集まった。

四人の僧りょの読経にはじまり、松平会長が祭文を読み上げ、参列者が順番に焼香した内の遺を弔った。参列者の中には左内の弟、綱常の孫に当たる玉利礼子さん（文京区在住）もいた。

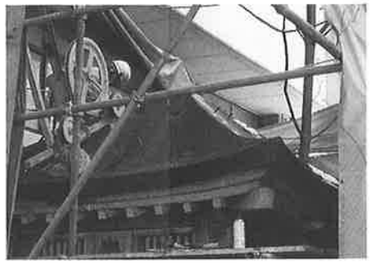
松平会長は「ことしは左内の生誕百五十年。昭和十年の生誕百年祭は東京でも盛大に行われたが、それに比べれば十分とはいかなかったのは残念。しかし精いっぱいのことはした」と参列者に語っていた。

## 福井の足跡 IN 東京(4)

文化財 NEWS速報

# 回向院橋本左内の墓套堂一件

套堂内にあった橋本左内の墓石
（移設前に保存修復が行われる）



解体工事作業風景

解体工事前の実測調査
（手前が套堂。奥に景岳橋本君碑が見える）

**套堂建設竣工奉告祭**（そう）

昭和8年（1993）7月1日
山田康彦『景岳会史』（景岳会、1935年）口絵

套堂は、福井県民を主なメンバーとする橋本左内を顕彰する団体・景岳会により、風化、損傷の激しい左内の墓を保護するために建設された。建設の庶務には景岳会の幹事であった平泉澄があたり、設計には、古社寺保存会委員であった黒板勝美（東京帝国大学教授・歴史家）や伊東忠太（東京帝国大学教授・建築家）が指導にあたった。毎年、10月7日の左内の命日に套堂前に祭壇を設け、墓前祭が行われていた。套堂は時に祭祀施設でもあった。

**史跡小塚原刑場跡**　南千住駅西側の回向院（南千住五丁目）は、江戸幕府の刑場の一つ小塚原刑場跡（区指定文化財・史跡）として知られています。境内には、杉田玄白らの腑分けの実見を記念した観臓記念碑、橋本左内・吉田松陰・頼三樹三郎（らいみきさぶろう）ら幕末の志士たちの墓（以上区登録文化財・史跡）、景岳橋本君碑（区登録文化財・歴史資料）など多くの文化財が残されていて、区内だけでなく全国からの見学者が日々訪れます。

**回向院に史跡エリア**　回向院では、昨年から墓地整備と回向院会館建設からなる境内整備事業が進められ、墓域の北側に史跡エリアが新たに設けられることになりました。境内に分散している文化財を一カ所に集め、一般の見学者に便宜を図ろうというものです。

**左内の墓の套堂**　橋本左内の墓は回向院入口右脇にありました。左内の墓石は套堂に納められ、さらに近くには左内の業績を顕彰した景岳橋本君碑が建っていました。この套堂は、昭和8年（一九三三）に左内を崇敬する景岳会によって建てられました。目的は、墓石の風化や破損を防ぎ、遺徳を偲ぶ空間を創造することにありました（事実、左内の墓は当時のもの）。関東大震災後に注目された鉄筋コンクリート製で、表面に人造擬石（ぎせき）洗出（あらだし）仕上げを施した近代仏教建築です。設計建築に当たっては、東京帝国大学文学教授・文学博士・国宝保存会委員などの片書きを持つ黒板勝美、同大教授・工学博士・史蹟名勝天然記念物保存協会評議員の伊東忠太が監修を、また東京美術学校教授・文学博士の沼田一雅が橋本家紋章デザインを行っており、当代一流の歴史学者、建築家、芸術家の知識・技術・感性が結集して完成した近代の文化的遺産といえます。

**套堂を未来に伝える**　橋本左内の墓も、史跡エリア内に移動することになりましたが、敷地面積の都合で套堂移転は困難になり、行き場を失ってしまいました。そんな時にあがったのが「南千住のシンボル的文化財である左内の套堂を守ろう！」という町の皆さんの声でした。有志の方々が年末の年越し準備の合間に町の隅々を回り、2週間ほどの間に800人近くの署名が集まりました。やがて町の皆さんの熱い思いは、套堂移転保存に繋がっていったのです。套堂は回向院から区に託されることになり、1月末に解体保存の作業が行われました。套堂は左内の墓石を守る役割を終え、次の出番を待つことになったのです。やがて、地域の歴史を伝えるために、皆さんの前に再び登場することでしょう。

（荒川ふるさと文化館だより第18号より転載）